

序 文

学 長 梅 村 清 明

今回土橋教授が還暦を迎えられたについて、論叢委員会がその記念号を上梓する運びとなり求められて茲にその序文を呈する次第である。

土橋文夫教授は大阪の富田村に生まれ広島高師文科を経て、京都帝大文学部を卒業され大阪商科大学の教官たる事二十年、学生主事教務主任等を勤められ、その間兼任講師として立命館大学に三年、奈良女高師に五年、関西大学に十三年、天理外語に七年講義された事もあり亦文部省の教科書検定委員もされたことのある学究である。昭和三十年四月からは本学に文学、倫理学担当の教授として赴任され三十二年四月より茲五ケ年は教養部長としてその所属二十余名の教官と約千名の学生の指導と統括に尽力されたのである。

土橋教授は人格高潔にして抱擁力に富み、その思考に鋼のようなバックボーンを感じると共に常に問題の核心を掴んで善処する絶好の学部長である、しかも珠玉の論文十篇あり研究は正に蘊奥を極むの感深く講義は引例該博にして興味津々この面について私は本学の双壁の一であると思ひ。

本学初代文化会長として五ケ年間御高配願った事も付記すべき事である。

上述の如き名教授の還暦記念論叢が本学より発刊される事は当然であるが欣快之に過ぐるはない。依って茲に敢えて土橋教授を紹介して以って序文とする。

(1962. 9. 18 天白山荘にて)